

# 佐伯三十三観音巡り・佐伯 I

吉田 勝重

(会員 佐伯市女島)

佐伯地区三十三観音巡りも第四回目を迎えた。

蒲江地区(清水庵・長命庵・慈眼院)を皮切りに、米水津地区(普門庵・潮月寺観音堂・東林庵・薬師庵・迎接庵)・鶴見地区(西生庵・福聚庵・常照庵・吉祥寺・常光庵)と続き、いよいよ、旧佐伯市内の寺院・庵を訪問する事になった。

一回目の訪問地は佐伯藩の御料、ごりょう堅田地区とその周辺の庵や寺である。

この佐伯藩御料の地には、毛利一族の佐伯藩政時代やそれ以前の梅牟礼城主佐伯一族の歴史的な遺跡が数多く残されている地である。

今回、訪問する寺々の説明の中にもその一端がかいま見られると思う。第一の訪問地は、竹角地区の妙智庵であ



る。

## 第十五番札所 妙智庵

御詠歌

笹の葉の影暗き世に住みながら

たへぬ誓ひにおくぞ嬉しき

この妙智庵は、十五番札所であり、臨濟宗江国寺末庵である。佐伯四国二十八番札所でもある。

この庵は宝永七年(一七一〇)日田代官所支配の時代に造られたものである。

御本尊は聖観世音である。

この妙智庵の境内には、経王乗寫塔

や六地藏、高木法眼の墓などがある。

慶長六年（一六〇二）佐伯藩初代藩主として毛利高政が入国した時、高政の弟、森吉安（毛利九郎左衛門吉安）に床木村の大半と塩月村、西野村、府坂村、棚野村、石打村、波越村、泥谷村、津志河内村、柏江村の十ヶ村二千九十八石余を分与し統治させた。

嘉永九年（一六三二）、森吉安は、二代高成たかなりの死去に伴う三代目相続問題で高成嫡子の市三郎たかなお（二歳高尚）との争いに敗れ、領地を幕府に返上した。

※吉安は高成の異母弟、高定たかさだ（高明三十一才）を推挙する。

この地はその後八年間、日田代官所支配となり、寛永十七年（一六四〇）から寛文八年（一六六八）までの二十八年間佐伯藩預かり、寛文八年から天明二年（一七八二）まで日田代官所支配。天明三年より廃藩まで佐伯藩支配という複雑な経緯を持つ土地である。

御料であったため年貢賦役等が緩やかで、参勤や下向御郡廻りの欲送や賦役はなかった。

庵の内部には、本尊の聖観音菩薩や弘法大師像、不動明王像が置かれていた。



不動明王像



聖観世音菩薩像

境内には、経王乗寫塔がある。



経王乗寫塔

この碑の文字の彫りは深く明確であった。

左の面には、「日野東易 藤原久富建立」「石工 染矢常藏」の文字がある。右の面は上部が剥離していて読めないが「〇政二甲二月到彼岸」の文字が刻まれていた。

「経王乗寫塔」の下の台座には、直弟兼全居士（享保）、弧實妙正信女（享保）、天雙良運信士（寛延）、天功真續信女（宝暦）、采馴童子（宝暦）、月華童子（天明）、智圭童女（文化）、花心童女（享和）、月光童子（文化）、普眺童子（文化）の名前が見える。その横に説明らしき文字が見えるが苔が多く明確ではない。

その他に境内には多くの古い墓石がある。



其の墓石の銘を

見てみると、「西淵宗竹首座」「當庵天道祖興首座」「為山宗功首座」「温室智栄信女」「精心恵性信女」などの名前が見えた。

首座とは、僧の職名の一つで「第一の座席」「上座」「首席」という意味である。妙智庵の入り口には天保年間の古い墓もあつたが苔むしており判読できなかつた。

高木法眼の墓は未発見。





第十六番札所

円通庵

御詠歌

晴れやらぬ心の奥の迷ひをば

照らす西野の嶺の月影

この庵が何時造られたかは明確でない。

佐伯四国二十九番札所で江国寺末庵である。本尊は一面観音菩薩立像で境内には笠塔婆や大乘一石一宇塔、寺の再興を記した梵鐘が残されていた。

この庵の開山は明確ではないが、庵内に「十六番 西野

邑圓通庵 佐伯三十三所 延享二乙丑稔正月十八日」と

書かれた御詠歌の額が残されている。

開山は、これ以前と考えられる。

本尊は、立派な臺の上に祀られていた。

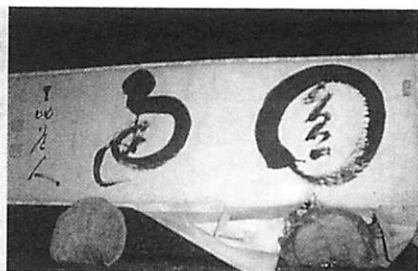


この地は、近くに柏江という良港を持ち、京都大阪方面に米などの産物を運び、都の文化を取り入れていた。

堅田地区で御盆に踊られる「堅田踊り」は大変優雅な動きを見せ、名調子として知られている。

この堅田踊りには、都で流行した浄瑠璃、歌舞伎などの影響が見られ、演目にもその様子が見られる。

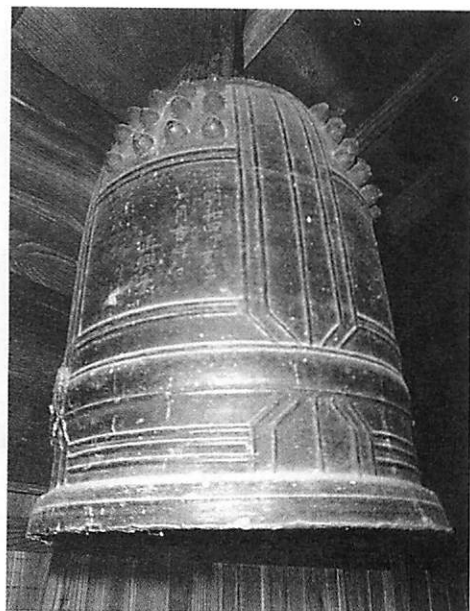
仙台北戸村で起こった父与茂作の仇を討った二人の娘の咄「志賀団七」や「染川口説」等がそれである。



本陣周辺には「圓通一里坊道人」と書かれた額を中心に左右に欄間などが見られた。本陣の左端には「娑婆示現観世音古往全来司一館」が、右端には「普百靈山妙法華全

住西方妙鬚願」と書かれた縦長の文字が見られた。

寺の梵鐘には「金剛山 江国寺末 西野村 圓通庵」  
「吉明和四年丁亥天 六月吉祥日來興秀」と書かれていた  
この寺が明和四年（一七六七）に再興されたことがわかる。



庵の外の大乗妙典一石二字塔があった。  
この塔は宝暦七年（一七五七）のもので、横に養賢禪寺の名が刻まれていた。

大乘妙典一石一宝塔



表 大乘妙典一石一宝塔  
左 竜昇山養賢禪寺 小比丘珠月山叟謹傳

大菴宗甫居士

裏 字々圓頓 入管城中 阿難結集 世尊融通

銘日 三車三艸 有別有同 十如十界 無儉煖豐

衣珠誰臍 家寶救○ 却會脱聲 洞徹真室

右 維寶曆七丁丑稔九月二十六焉



第十七番札所

御詠歌

ぶつとくざんじょうらくじ かんのおんじょう  
仏徳山常楽寺観音堂

波越戸聞けば憂げなる里の名も

住む心にや常に楽しき

三番目の訪問地である仏徳山常楽寺は現在には存在しない。

観音堂の横の庫裏の向こう側にあったと言われている。

天正十四年（一五八六）の堅田合戦の際戦火に遭い廃絶したという。

この観音堂は常楽寺の付属のものであった。臨濟宗江

国寺の末庵である。開山は鎌倉時代（一一九二〜一三三三）と伝えられている。

本尊は十一面千手観音である。



十一面千手観音像

観音堂の本陣には、この十一面千手観音堂の外に不動明王像などがある。

特に、文化財として教育委員会に保管されている常楽寺鰐口（豊後州佐伯庄堅田村常楽寺之公用也 文安四年閏二月二十八日願主惟直）や佐伯惟治が寄進したという陣羽織の残欠が残されている。

又、本陣の右側には、歴代住職の位牌九基が祀られてい



る。

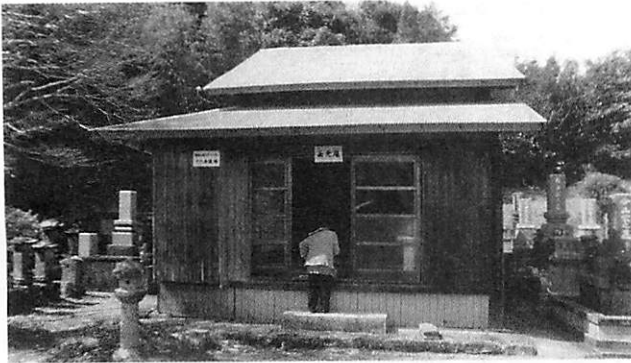
位牌には「前常越山圓長老禪師」「當寺再中興正觀宗尚  
諡和尚禪師」「月鑑直圓上座 覺靈」「劍光院忠肝義徳居  
士」「妙心前堂當山弘道瑞和尚禪師」「當寺開山勅諡法智普  
光禪師大和尚」「持贈再住怒圓應雙和尚禪師」「禪住妙心願  
行大喪和尚」「歸寂○智義和尚」などの名前が見える。  
その他、数多くの位牌が置かれていた。

この寺の沿革は、堅田合戦で戦火廃絶ののち、寛保年間  
(一七四一〜一七四三 日田代官所支配中)に江国寺二世  
洪州和尚により再建されたという。

堅田合戦と言うのは、天正十四年(一五八六)十一月三  
日に轟峠を越えて大越おおよえに侵入してきた島津家久の軍勢と  
梅牟礼城を守備する佐伯惟定軍とが戦った合戦の事であ  
る。

佐伯方の軍師、山田匡徳が地の利を生かし、偽兵などの  
作戦により島津軍を撃退した。長瀬原の戦いとして有名  
である。島津軍の死者を吊った供養塔が岸河内や長瀬原  
に建てられている。詳しくは大友興廢記などに記されて  
いる。

この常楽寺も、この戦いの際、戦火に遭ったものと考え  
られる。観音堂が残ったか否かは明確でない。



第十八番札所

御詠歌

妙香庵観音堂

ちりひじや積もりてのみの高根とも

聞けば歩みも仇ならじかし

妙香庵観音堂は  
浄土宗養福寺の末  
庵である。開山は不  
明である。

本尊は聖観音菩  
薩座像である。

現在、庵は西光庵  
と呼ばれており、本  
陣には聖観音と並  
んで阿弥陀如来像  
が安置されている。  
境内には金剛般  
若塔や錫杖塔など  
の石像物が多く見  
られる。

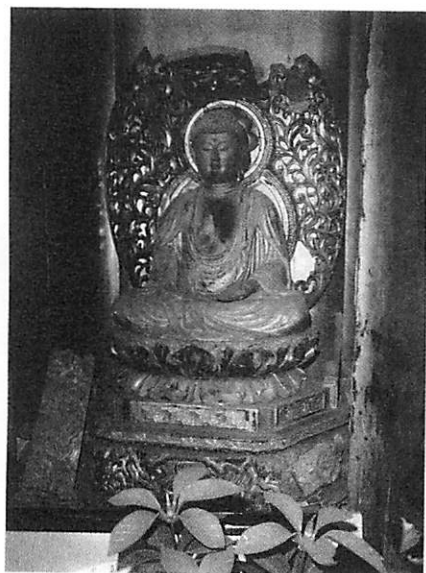




聖観音菩薩座像



聖観音菩薩座像



薬師如来像



阿弥陀如来像

本陣には、中央に阿弥陀如来像を置き、聖観音菩薩像、薬師如来像、弘法大師像などが安置されていた。

また本陣の右端に、徳川三代の位牌が安置されていた。



徳川家将軍 三代の位牌

上に葵紋が書かれたもので、高さが三十センチ以上ある。戒名は「東照宮大権現神儀（家康〓中央）」「大猷院殿贈正一位大相國公・尊儀（家光〓右）」「台徳院殿贈正一位大相國公・尊儀（秀忠〓左）」とある。

なぜ、この庵にのみ三代の位牌が祀られているのか、徳川御料との関係かもしれないが説明はなかった。

他に、當院中興の空信上人の位牌もある。

位牌には「當院中興法蓮社性學空信上人重天大和尚」と書かれている。

庵の裏手には「見比錫杖塔」の大きな碑がある。



見比錫杖塔

碑面には次のような文字が書かれていた。

一見錫杖塔即直如見須彌法界卒都婆一切  
衆生滅如生死險難空入浄土之法明掃除煩惱  
出離三界智慧明了得八解脱故書写大乘妙典  
一石一字経宝塔之為功德生者也

前長松禪寺覺千拙謹誌之

この他に元禄十四年の銘の入った南無阿弥陀仏と書かれた石碑や、この寺の歴史の一端を示す「移転記念碑」があった。



った。

移転記念碑は大正六年秋に建てられたものである。

記述の一部を記述してみよう。

### 〈移転記念碑〉

當寺ハ在昔日向佐土原ノ領主内田少将正明来タリテ堅田ニ來偶シ 其子淨龍寛永元甲子年一字ヲ創立シテ佐土原寺ト号ス 三世教傳東永寺ニ帰依シ先祖ノ名乗ヲ以テ正明寺ト改称ス○此地人家僅少ニシテ中間ニ堅田川ヲ隔テ布教上不便尠カラス加ウル二年々水害ヲ蒙ルコト格別ニシテ大正元年秋満水ハ境内ヲ盪カン堂宇ヲ破壊シ慘状筆紙ニ尽シ難シ於此寺槽相謀リテ門池移転企テ泥谷村ノ字由地ヲト其筋ニ許可ヲ得大正二年秋起工翌三年七月竣工ス依テ元境内地

ノ佐土原本堂跡ニ大乘妙典一石一字寶塔ヲ建設シ當山寺地○○シテ永遠ニ記念シ併セテ……とある。

この寺の名前は、今は西光庵であるが、以前は佐土原寺、正明寺と言っていた事がわかった。

境内には大乘妙典一石一字塔や大乘妙典石寫塔が幾つもある。

その一つの大乗妙典一石一字塔は、表面が赤く塗られており、側面に次のような文字が書かれていた。



大乘妙典一石一字塔

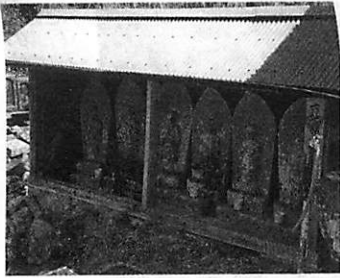
維時寶曆七丁丑歲七月十六日

童昇山 養賢禪寺 珠月山叟謹銘

豊后菊海郡堅田泥谷邑

功德主 汐月安右衛門範秀

法稱 範嶺子規居士



地蔵菩薩と  
西光寺の六地藏

私たちは、この西  
光庵の視察を終え、  
今回の五番目の訪  
問地である臨濟宗  
妙心寺派の江國寺  
に向かった。  
江國寺は、堅田地  
区の柏江にある大  
きなお寺で、その境  
内に今回訪問する  
観音堂がある。



第十九番札所

御詠歌

金剛山江國寺観音堂  
こんごうさんこうこくじかんのんどう

ただ頼め絶えぬ力を柏江の

水にも月の澄むとこそ聞け

この江國寺は万治  
元年（一六五八）に  
槐州和尚により建  
立されたという。

観音堂はそれと  
同時、あるいは享保  
年間までに建設さ  
れたという。

文化元年（一八〇  
四）に箭山和尚が再  
興している。

この江國寺は、佐  
伯藩初代毛利高政  
公の弟、森九郎左衛  
門吉安の屋敷跡で

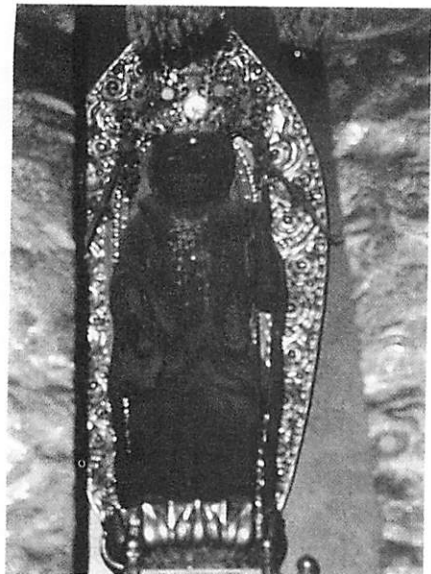
ある。

関ヶ原の戦いの後、秀吉から高政に一万八千石、弟吉安に二千石を与えたという。

此の地が幕府領（御料）となったのは、三代藩主をめぐってのお家騒動に原因がある。

江国寺の開祖、槐州和尚は養賢禅寺三代目である。蒲江の東光寺を開いた人でもある。

寺は、今から二百年前は脇の奥、野中という所にあった。本尊は准胝観音菩薩立像である。



准胝観音菩薩像

この准胝観音は、天台宗や真言宗で祀られている観音である。真言宗小野流六観音の一つである。境内の一角に森九郎左衛門吉安の墓がある。



森九郎左衛門の墓

お墓の前面には「捐館江国寺殿秀山宗才大居士神儀」側面に「寛永十七庚辰四月朔日」「森九郎左衛門吉安 齡六十八歳卒」と刻まれていた。

この他に珍しい亀趺（亀の形を刻んだ台石）にのつた句碑がある。江戸時代の作という。碑面には「古流伊計也可波津刀比古武 美都乃於登 辛酉秋立之」と万葉仮名で刻まれている。

江戸中期に、俳諧の道にいそしむ風流なグループがいたことを示している。

柏江は、江戸時代御領の産物を積み出し、上方文物の輸入・交易港として栄え、堅田郷の中心地だった。

また上方方面からの文化や芸能を導入した影響のあとがみえる。柏江港が盛んな時は、千石船の行き来が在ったという。

優雅で有名な堅田踊りは、現在文化財愛護少年団保存会によって継承されている。

また、柏江には勤王の志士、青木猛比古あおきたけひこの碑もある。



青木猛比古の碑



二十番札所

御詠歌

福寿山天徳寺ふくじゅざんてんとくじ

頼まばや二世のしるしも天徳寺

のりの林のはるにしぞ遇ふ

天徳寺は臨濟宗妙心寺派の寺で佐伯四国三十一番札所でもある。

開山は不詳であるが中興は天正年中（一五七三〜一五九一）であるという。

本尊は釈迦如来座像の前佛として祀られており、如意輪観音菩薩である。脇仏として千手観音菩薩立像が祀られている。



如意輪観音菩薩

この天徳寺には、大友宗麟の墓といわれる墓がある。天正十三年（一五八五）大友宗麟はキリスト教の国を造らうとして南下、島津氏との豊薩戦争となる。

その当時、宗麟は臼杵城に居を構え、前進基地の津久見市に出てきていた。

その頃、天徳寺は津久見市に在ったという。

当時の記録が三百五十年前の火事で焼失しており詳しい事はわからない。

のち佐伯の上久部に移り、現在の地に移動している。



大友宗麟の墓

この大友宗麟のお墓は、表面に「寂静じやくじょう」と書かれている。「寂静」は「涅槃寂静」の言葉からきたものであるという。大友宗麟は津久見市で亡くなり、墓が大友墓地公園にあるが、キリスト教禁止により薬師堂を建てるという名目で、その骨を分骨し持ち帰っている。

この臼杵からの移転の際に、佐伯市蒲江尾浦地区に大友氏の家来が住み着いたという。その为天徳寺の檀家として二十二軒の方が尾浦に住んでいる。

観音堂の左手には、昭和十八年建立の建物がある。



この建物には一部が唐破風に造られており、瓦には笹竜胆の紋が見られる。

建物の裏にはメタセコイアの林も見られた。

又、観音堂には大友宗麟が大徳寺に寄進した際に正親町天皇から戴いた額「随縁断惑」がある。

「南無東方薬師如来 瑠璃光如来」の札や「大日本帝国皇室御歴代尊儀」の位牌も安置されている。観音堂の建物は最近改築したもので新しく、瓦に天徳

寺の「天」の異体字「天」がつけられていた。今回の三十三観音巡りはこれで終了した。



西野のお塔

今回訪問した「堅田地区」には、この他に多くの歴史的文化財が残されている。

その代表として西野地区に、梅牟礼城主佐伯惟治関連の史跡「西野のお塔」「石打のお塔」等がある。

これは大永七年（一五七七）、梅牟礼城主第十代佐伯惟治が大友氏に謀反の疑いをかけられ、宮崎県方面に難を避ける途中、宮崎県延岡市尾高千山にて戦死し、その子千代鶴丸君がこの地で自刃した事に由来したものである。

このような歴史的文化財は地区毎に大切に保存されている。